ろ京
文多
杉乃露
之

自ら古代の色やすく
ふるまひ又話人也みの如
生涯をむさぼるの名をえて
老をむかふるおいの姿なり
旅行抱ふさ古人も多く路
死をうけりそれいつれの
よりか行きの風ふれて

漂泊の
ユさすら
の作
まひて
また雲の
こころ
心そ

随斎栄縁

いうまでもなく仏教は清世産寺院て
かゝる事門のとをそなる外に
人を集むる多くの
集まるやうなあれしの
唯学問を勉強するを
倫国の者也

恒也

剛毅果敢の
気稟秀清質也
幼日朝日海山
往昔秋海山を
帝廟大仏開基の時日光を
改めよ千歳未来をさとる

それも
吉光

と松の岸辺と岩手付近

いそやゆく末の松を波こえて

年内春立つ枝を東風

八十島

八十島もまだふみさかひ

なき八重の道のほどうちも

はいまだ見ぬうの花よりも

山を松ふく風

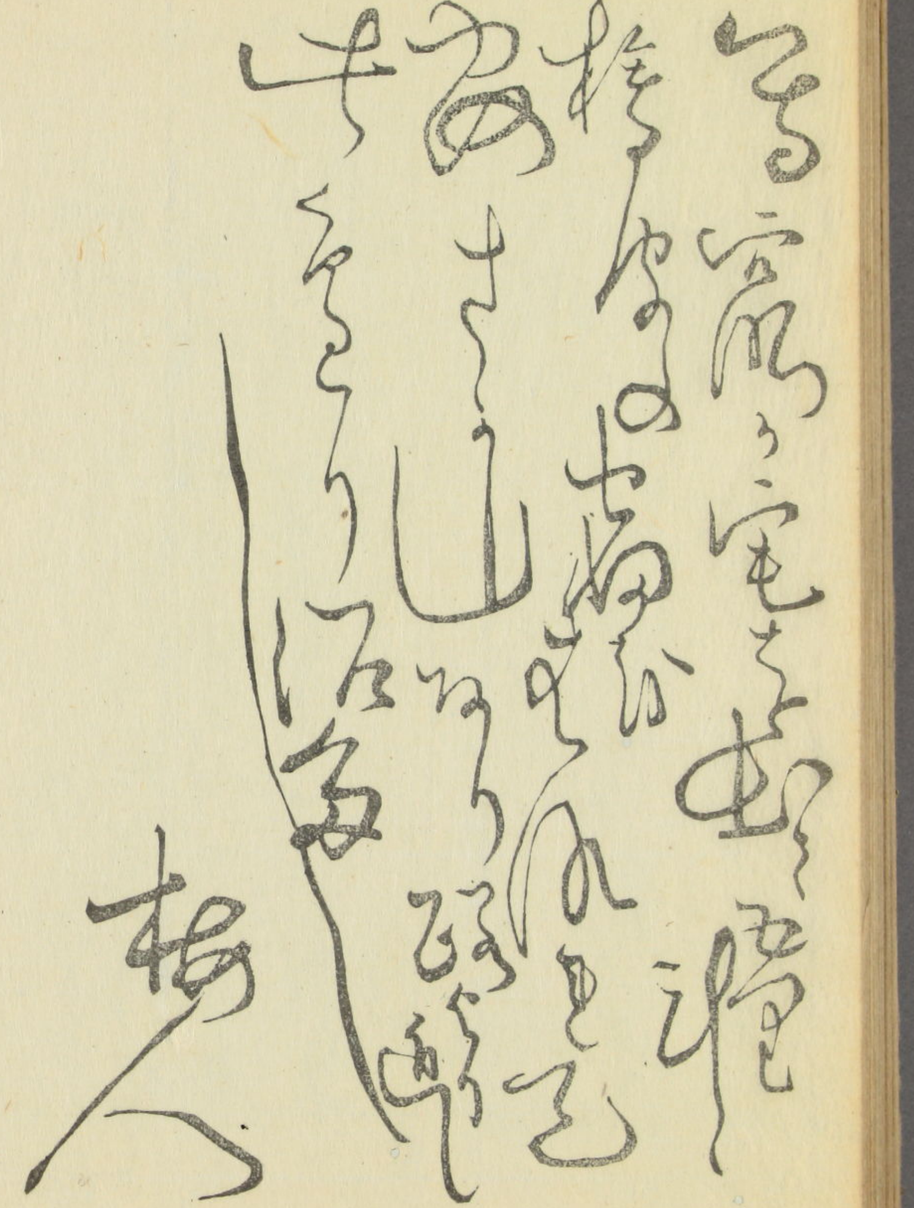
渓ふかく松杉黒く苔

古木年を経て

春立つ山

作てかの改てくれの文の祖よめ
雪字し詠の山ふ琴如気乳奏
石上の小琴岩家宿ふ猫心ゆけ
雪雪如猫ゆ雪気し雪
詠ゆの石宿ふ人家ふ
未啄も琴ふ
旨及未立

琴高
相公



大事を越す沙汰なんの妹をも
笠守の郎子を藤井の要方の
塚そうくの神なんと人みとくは
よそまとまこと云ふ
このわざをいふ道祖神の社
かくこの芝いまたてまつる

甲癸

漫々書

先能回法師思ひ往昔むつまじくて
下ゆく人この木なけ伐てな名れ川の橋杭
年古ふるまゝなるもやまを
さたひ行ともれ〳〵と詠ふ多き代と哉い
伐なふい指跡なとゝ物しるまいまゝ
千年のうちのひて名ふる多き
松のう一本なりん侍し

武陵書

雪白とりみ給ふ〳〵ふい

桜よりも雪は二月を三月哉

ぶこ存

名取川を渡て仙台へ入ああふく
日なれ橋布をふめて四百里迄た
宮ま重立かたへとふものゝ卯ふ
あるものとやて和る人なるこの若
年ふさふるね名取を歩通れい

とて一日東国すると雖も二秋哉り

あひて秋のたーまさ玉田

よと聖てしう哥ハこうまひ咲よう

なり日新もの松の梢へて富を

求下といふとも昔もうく富ありたれハ

こゝろさしとハよまれ

ほのぐ

安重喬

出

素堂夫秋乃清中う

なとて和ぐとものハさまれ

狂吉為ハ龍の紅落よ

かゝるものゝ生ける生涯の楽結

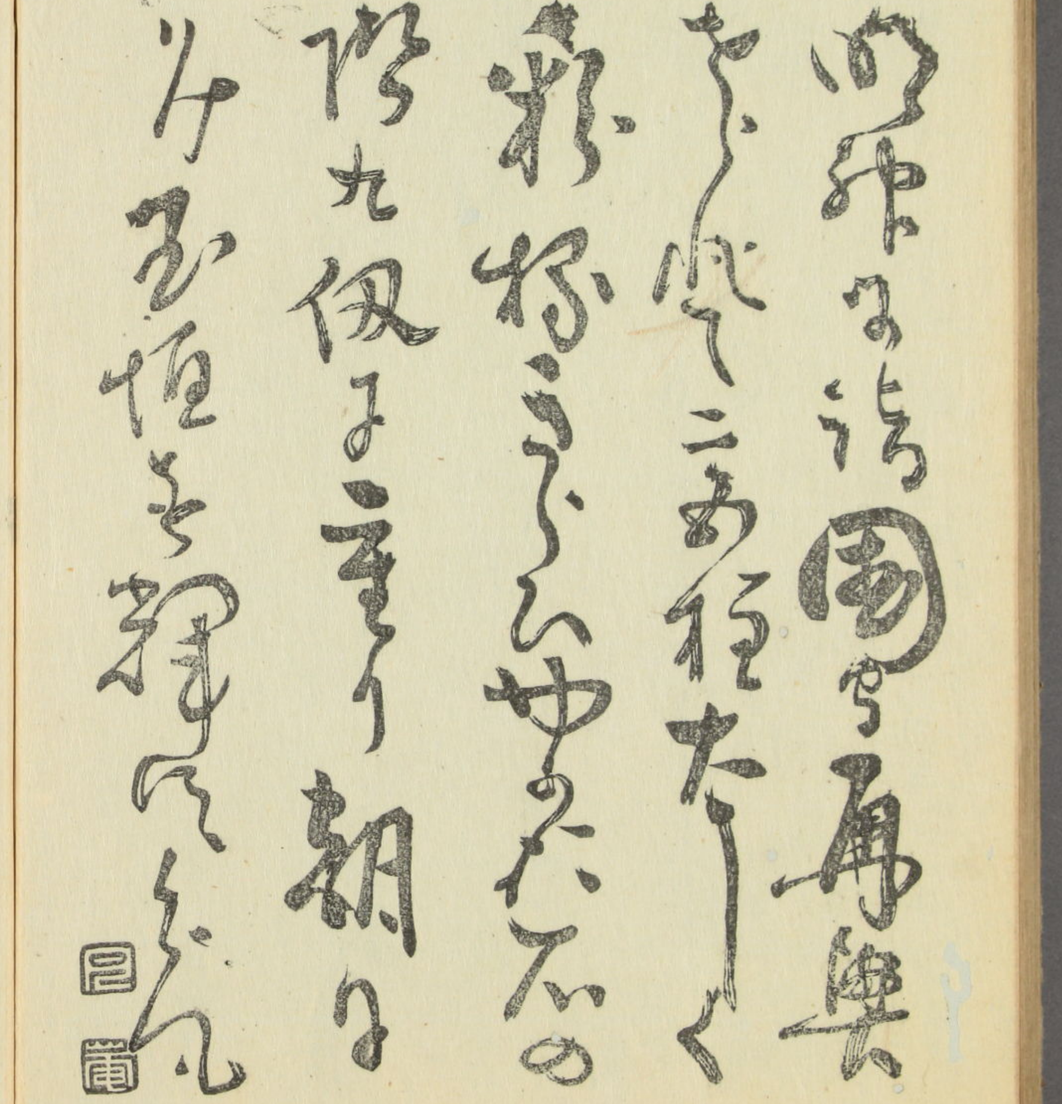
什ぐ家荘雑

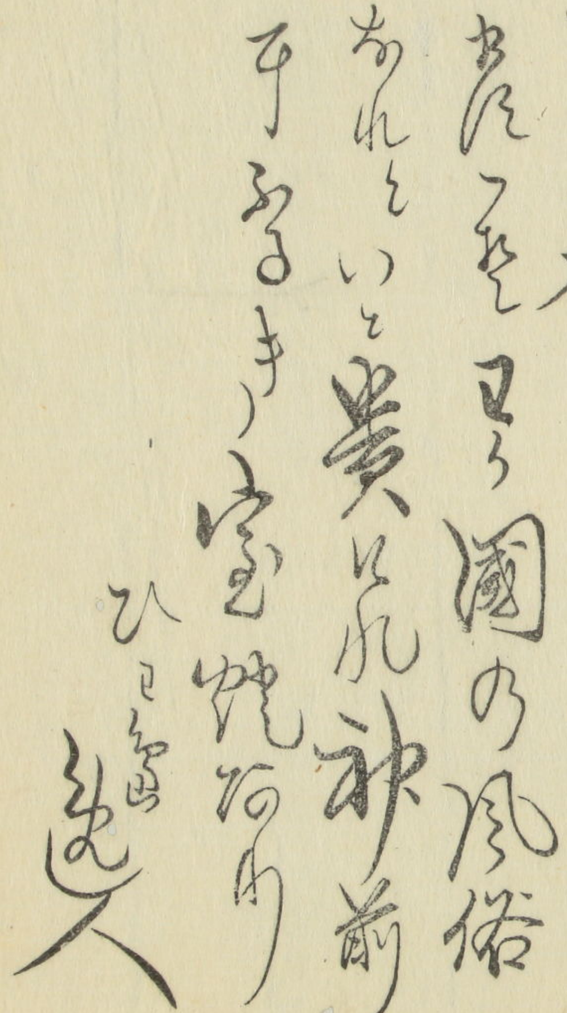
吉雯

国史の校正を
命ぜられ
将軍大納言
卿と東人と行
事也

筑前博多自由亭出

天平宝字六年冬薩南海南
節度使将軍恵美朝臣猶
修造兩十二月乙丑朔
皇帝の法
よう
歌
山背
石を

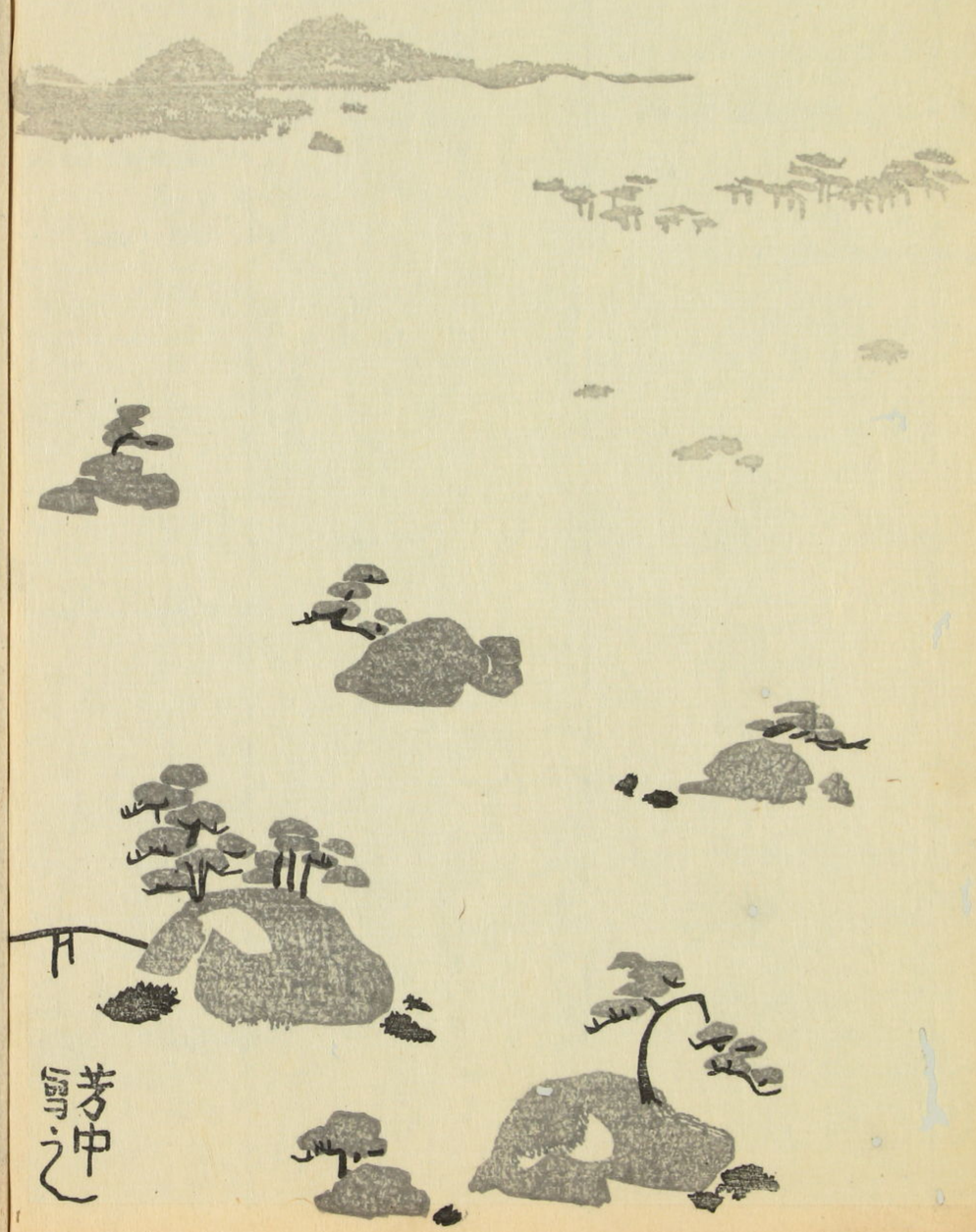




かきのこひ
三ま名
吾妻集
月乃ま
めつら
祥文

追おい而而義ハ
今ハもて志つめ
誠よ人道を
ゑし
日法年よちのし
雪嶋に渡る
神よ
ゆく

武庫一ま謹書


芳中寫之

素絢